

生成 AI を活用した歌詞創作授業の試み

—小学校・総合的な学習の時間における実践—

岡野健人*1・阿部学*2・下大澤翔吾*3

Email: kento.okano.research@gmail.com

*1: 千葉大学大学院教育学研究科 *2: 敬愛大学教育学部 *3: 市原市立石塚小学校

◎Key Words 生成 AI, 歌詞創作, 総合的な学習の時間

1. 背景

2022年11月にOpenAI社が生成AIを基盤としたチャットロボット型ツールChatGPTを発表して以降、生成AIが社会の中で大いに注目を集め、その活用のあり方についての議論が急速に進むことになった。

我が国の学校教育においても、2023年7月という早い段階で「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」が文部科学省¹⁾より発表された。そこでは、生成AIの性質やリスク等について総合的に勘案しつつも試験的に取り組みを進め、生成AIをどのように学びに活かしていくか議論を重ねることが必要だと示されている。

すでにいくつかの実践事例が報告されている。2023年10月までの情報のまとめ²⁾によれば、小学校の授業では「教師のみが生成AIを操作する」仕方での活用が基本となっており、すべての事例において生成AIについて意見を聞き、回答をもとに児童が考えを深めたり、回答と自身の意見を比較したりすることが行われている。このように、小学校では「壁打ち」「たたき台」として生成AIを活用しようとする傾向があるとされている。

2. 目的

このように先行実践の蓄積は進んでいるが、学校教育における生成AI活用はまだまだ探索期にあると思われる。さらに様々な教科・分野での提案が期待されたり、生成AIを「たたき台」とするとしてもその実際は様々であると想像されたりする。

そこで本稿では、X小学校4年生・総合的な学習の時間における生成AI活用の実践について報告をする。詳しくは後述するが、本実践では子どもたちが生成AIを活用しながらオリジナル曲の歌詞を創作するという表現活動に取り組んだ。

本稿では、この実践についての考察をとおして、生成AI活用のあり方について示唆を得ることを目的とする。なお、生成AIと歌詞創作をかけた事例の報告は筆者の調べる限り見られない。また、先行実践では生成AIに意見を聞く（特定の問題についてどう考えるか）という活用が多いのだが、本実践での活用は、先に特定の問題がありそれについて聞くのではなく、生成AIとともに表現を探っていくというものである。生成AIに何かを聞くという行為は同じでも、「壁打ち」「たたき台」としてのあり方には差異があると想定される。

3. 歌詞創作の実践

子どもが歌詞創作に取り組む実践は、音楽科や国語科や総合の枠組みなどで行われることがある。報告は少ないものの、その一つにミュージシャンが子どもとオリジナル曲（歌詞）を共作するという実践がある³⁾。この実践では、ミュージシャンが一方的に表現の指南や舵取りをするのではなく、子ども一人一人との対話をとおして表現をともに探っていくことが重視されている（皆で一つの曲をつくるのではなく、子どもそれぞれが自分の歌を一つ創作する）。実践の過程からは、ミュージシャンが対話的に子どもと関わろうとすることで、子どもたちがそれぞれの仕方ですべてを深められたと考察されている。

ただし、この実践からは生身のミュージシャンが子どもと関わる限界も示唆される。一人のミュージシャンが一人の子と熱心に対話するほど、他の子の対話時間は減少してしまう。表現のために対話が重要だとしても、対話にはコストがかかる。有限の中で何事かをなさなければならぬ学校教育において、どれほど対話を深められるかについては難しい面もある。

他方で、生成AIが表現活動において子どもたちのよき対話の相手となりうるのであれば、授業デザインの可能性も広がると思われる。そうした可能性を想定しつつ、後述の授業実践を構想していった。

4. 授業実践の概要

本実践はX小学校4年生・総合的な学習の時間の枠組みで、2023年の12月から2024年2月にかけて行われた。単元のテーマは、全校行事「6年生を送る会」にて6年生への感謝の気持ちを伝えるというものである。気持ちを伝える方法や会当日の役割については、年間をとおした学びの積み重ねをふまえ、いくつかのコースが教師によってデザインされていた。その一つに会当日に学年全員が歌って送る予定のオリジナル曲の歌詞を創作するというものがあり、学年の中から立候補したメンバー4名がこのコースに参加をした。

オリジナル曲の創作方法については、授業者⁴⁾が曲（メロディ）を先に用意しておき、そこに子どもたちが歌詞を載せ、必要に応じて曲を微調整するという方式をとった。この歌詞創作のプロセスにおいて「教師のみが生成AIを操作する」仕方では生成AI（ChatGPT: GPT-3.5）を活用した。なお、授業者は生成AIについて学ばせることを主眼としていたのではなく、あくまで子どもたちに愛される歌詞ができるよう支援することを目指していたため、生成AIの活用は限定的な範囲にとどまっている。

5. 歌詞創作のプロセス

オリジナル曲をつくるにあたり、子ども一人一人ひいては学年全員の思いをできるだけ反映させた歌詞をつくりたいと教師も子どもたちも願っていた。しかし、大人数で歌詞をつくるということは容易ではない。仮に全員の提案する言葉を形式的に並べるとしても、それを質の高い詞とするには相当な工夫が必要となるはずである。

そこで、次の手順で歌詞創作を行うこととした。このような手順をふむことで、全員の思いをできるだけ反映させるということ、質の高い歌詞を目指すということが両立できるのではないかと考えた。①歌詞創作の参考とするために4年生全員が6年生にインタビューを行う。学校生活の思い出を聞いたり、歌詞になりそうな言葉を探ったりする。②インタビューをもとに、6年生に送りたい言葉やメッセージ、歌詞の案などを考え、4年生全員が提出する。一人5案まで提出する(約620案を想定)。③その学年案をもとにして、歌詞担当のメンバーが歌詞を創作する。自力で歌詞創作に挑戦しつつ、生成AIの助けも借りることにする。具体的には、学年案を生成AIに読み込ませながら歌詞のアイデアを出してもらい、その生成AI案をもとに自分たちで歌詞を練り上げていく。

授業者は、学年案があがった時点で歌詞担当のメンバーにひとまずすべての情報を共有し、これをもとに歌詞を考えていこうと伝えた。数日後、メンバーの様子をうかがってみると、「数が多い」「このままでは難しい」という意見が出された。第一案を提案できる子もいれば、意欲はありつつも手つかずの子もいた。

そこで、授業者から生成AIの活用を提案することとした。③のとおり学年案を生成AIに読み込ませ、次のプロンプト「あなたは作詞家です。これから作詞家として相談に乗ってください。小学校を卒業する6年生に送る歌をつくっています。歌詞に反映したい言葉やイメージを以下のとおり考えています。しかし、数が多いため歌詞としてまとめるのに困っています。これらの言葉やイメージをふまえて、歌詞の案をつくってもらえませんか」ととっかかりとして、歌詞の「たたき台」を出してもらうこととした。子どもたちは、生成AIの活用は初めてであったようであり、即座に案が出てくることにまずは感動し、その後は回答をよく読み、「もっと感動できるように」「もっと……風に」「……(固有名詞)を言い換えて」「1組の案だけで聞いてみてほしい」など次々に要望をリクエストし、教師に入力してもらった。

教師の記録によれば、この時間を境にメンバーの「意欲が爆上がりした」とのことである。それぞれから積極的に提案があったり、話し合いにおいてこれまでは発言がなかった子が積極的に発言したりという様子が見られるようになった。教師からすると「生成AIのおかげで語彙力が増した」「歌詞づくりのコツのようなものを自然と習得していった(自然と韻を踏むよう検討したり、比喩的・間接的な表現などを使ったりするようになった)」と感じられたようである。歌詞の案や、話し合いで出される語が以前とは大きく変わったとのことである。

最終的に、メンバーによる歌詞が学年に提案され、熱烈に受け止められた。熱心に歌唱練習が重ねられ、当日に6年生に送られるに至った。6年生や他学年の教師からも絶賛と言ってよいほどの反応があった。またその後も、

年度末のふりかえりを行う際に歌詞を引用しながら記述をする者がいたり、年度をまたいで歌詞に関連することを教師に伝える子がいたりするなど、ここで創作した歌詞が多くの子に愛着をもって受け入れられたこと、すなわち質の高い歌詞がつけられたことがうかがえる。

6. 考察

本実践では、生成AI活用しながらの歌詞創作を試みた。実践のプロセスからは、次の点が考察される。

第一に、集団で表現をする際の教育方法の工夫についてである。今回は学年全員の思いを反映させた歌詞づくりに挑戦した。生成AIを活用することにより、子どもでは判断しきれない量の情報を処理することが可能であることが分かった。実際にどの程度全員の思いが反映されたかの判断は難しいが、子どもたちの曲への愛着は高く、歌詞への納得度も高かったようである。生成AIを活用することで、個だけでなく集団での表現活動をデザインする可能性が広がると思われる。

第二に、生成AIが子どもの表現活動における「たたき台」たりうる一面が理解された。本実践のメンバーは、創作に悩む中で初めて生成AIを活用して以降、活動への意欲がかなりの程度高まることになった。その後も、自発的に生成AIに尋ねたいと教師に要望するなど、「たたき台」として期待をしていたことがうかがえる。生成AIを「さん」づけで親しげに呼ぶ様子も見られ、よき相談相手と認識されたようである。

第三に、表現活動において生成AIの活用を想定した場合、レクチャー不要の授業デザインも可能であることが示唆された。本実践のように子どもたちが歌詞の創作に悩むのであれば、「歌詞の書き方」のようなレクチャーを事前に行うことにも意義はあろう。授業者はそうしたプロセスを踏むことも検討していたが、今回は生成AIの案に対して省察することを繰り返すのみとする判断をした。それでも、前述のように結果として子どもたちの歌詞創作は充実したものとなったと思われる。表現活動に関するレクチャー不要の授業デザインの可能性が示唆された。

第四に、生成AIを活用する際の文脈の重要性についてである。本実践から上記のような生成AI活用の有効性は示唆されたが、それらはすべて「6年生に思いを伝えたい」「よい曲をつくり、送りたい」という思いがあつてのことだと思われる。よい歌詞をつくりたいのだがうまくできないという文脈があつたからこそ、子どもたちは生成AIに期待をすることになった。生成AIを授業にうまく取り入れるためには、生成AIとの出会わせ方、それを使いたいと思えるような文脈の設定が教師に求められるのだと思われる。

注・参考文献

- (1) 文部科学省: “初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン”, (2023).
- (2) 藤川大祐: “初等中等教育実践における生成AIの活用のある方”, 千葉大学教育学部研究紀要, 72, pp.83-90 (2024).
- (3) 阿部学: “ある歌づくりの授業における「作詞ノート」の活用”, 授業実践開発研究, 1, pp.41-50 (2008).
- (4) X小学校の教諭および授業に協力した者(筆者ら)を指す。